

【研究論文】

教職・保育職を目指す学生に SDGs 活動実践を行なった際の学生の学び —岡崎市の NPO 法人ゴスペルエイド現地スタッフの講話を通して—

岡崎女子大学 宮腰宏美

要 旨

岡崎市を拠点とする国際 NPO 法人ゴスペルエイドの現地のネパール人スタッフであるシータ・バディ氏による講話を通じた学生の学びについて調査を行ったところ、世界が抱えている問題への関心、国際社会の現状についての知識および国際的な視野について、一定の効果を確認することができた。また、講話の中で最も印象に残ったことについては、カースト制の下、差別を受け続けてきたシータ氏が逆境に立ち向かい、現地において「カースト制」のイメージそのものを変えようとしていることについての記述が散見された。

1. はじめに

2021 年度、筆者が保育士資格、幼稚園教諭免許を目指す学生に対し、岡崎市を拠点とする国際 NPO 法人であるゴスペルエイドと協働した岡崎女子大学における SDGs スタンプラリー等による啓発活動を行った結果、経験者による講演や参加型の活動が効果的であることが明らかとなったとともに、日本において行うイベントの際に参加する学生の国際的視野の拡大を狙う場合には、外国人との触れ合いを推奨することが課題として挙げられた(宮腰, 2022)¹⁾。

2022 年度には、上述の NPO 法人より、2022 年 9 月上旬より、現地のネパール人現地スタッフであるシータ・バディ氏が 9 月末まで日本に滞在するという連絡があった。そこで、学生の国際的視野の拡大を狙い、同法人にシータ・バディ氏の講話を依頼した。

2. 先行研究

(1) カースト制度とネパールにおけるバディ族への差別について

ネパールにおけるカースト制は、1300 年代に、マッラ王朝第 7 代のジャスティティ・マッラ王が政治、社会、文化の各分野で改革を行うにあたり、インドを参考にカースト制を導入した(宮崎, 2022)²⁾。1854 年にムルキ・アイン法典が公布されてからは、主要な組織原則および社会的アイデンティティの主要な決定要因と見されている(宮崎, 2022)³⁾。

ネパールにおける厳格なカースト制度では、バウン(司祭・学者)、クシャトリア(王族・武人)、ヴァイシャ(市民・商人)、シュードラ(旧奴隷階級・労働者)という 4 つの階級に分類されている(ヨヤーナ, 2017)⁴⁾。シュードラとは別に、ネパールでは、政府が不可触民を指す時に用いる「ダリット」という呼称が使用されており、ネパールの総人口 2,600 万人に対し、ダリットの人数は、450 万人である(ヨヤーナ, 2017)⁵⁾。カーストの最下層であるダリットは、経済的に搾取され、政治的に発言権を持たず、不可触民として社

会的に侮辱されており、ネパールのダリット女性は、制度の犠牲者であり、耐え難い残虐行為を負ってどん底に立っている (Bishwakarma, 2004)⁶⁾。

ダリットの中でも最下位に位置付けられているバディ族は、売春を職業として宿命づけられている (青木, 2022)⁷⁾。バディの祖先について、藤倉 (2022)⁸⁾は、数百年前北インドから移住してきたといわれており、女性は踊りや歌、男性は太鼓づくりや漁をしていたことから、18世紀の国家統一以前は、西部ネパールに位置する幾つもの小王国において、バディの女性たちは、踊り子や歌い手として、宮廷や大地主に仕えていたと述べている。しかし、ネパール近代国家形成に伴い、バディの人びとは小王国の宮廷や大地主からの庇護を失ったと同時に、伝統芸能による収入の道も閉ざされたことにより、バディ・コミュニティでは、女性の売春による収入に頼るようになったと、藤倉 (2022)⁹⁾は説明している。

Gautam・Soomro・Sapkota・Gautam・Kasaju (2018)¹⁰⁾は、ネパールで最も恵まれない、疎外されたグループの1つであるバディコミュニティの人口は、2011年の国勢調査によると38,603人であり、政府がコミュニティ内での売春の廃止を宣言したにもかかわらず、今でもバディコミュニティの女性の6%が性売買に関与していると指摘している。

実際、1959年の憲法でカースト制が廃止されてからも、実生活においては、元不可触カーストの人びとに対する差別が続いている (藤倉, 2022)¹¹⁾。2010年には、ネパール政府は、「売春の仕事を禁ずる」という通達を出したが、バディの人々には、代替の仕事がなく、生計を立てるために今も継続しているコミュニティがあると、青木 (2022)¹²⁾は述べている。

(2) SDGsとジェンダー

2000年の国連ミレニアム・サミットにおいて、ミレニアム開発目標 (MDGs) が2015年までに達成すべき目標として宣言された。第3目標では、「ジェンダー平等の推進と女性の地位向上」が掲げられたが、2015年を過ぎてなお、52か国が憲法で男女平等を定めておらず、男性に比べて女性の賃金は22%低く、パートナーを含む男性から暴力を受けた経験をもつ女性は35%存在していた (浅井, 2019)¹³⁾。そこで、2015年に国連で採択された、17の目標をもつSDGsの5番目の目標「ジェンダー平等を実現しよう」が設けられ、Achieve gender equality and empower all woman and girls—ジェンダー平等を達成し、全ての女性及び女兒の能力強化を行う—との目標が掲げられている (外務省, 2022)¹⁴⁾。

小目標としては、5.1 End all forms of discrimination against all women and girls everywhere—あらゆる場所における全ての女性及び女兒に対するあらゆる形態の差別を撤廃する—、5.2 Eliminate all forms of violence against all woman and girls in the public and private spheres, including trafficking and sexual and other types of exploitation—人身売買や性的、その他の種類の搾取など、全ての女性及び女兒に対する、公共・私的空間におけるあらゆる形態の暴力を排除する—、5.3 Eliminate all harmful practices, such as child, early and forced marriage and female genital mutilation—未成年の結婚早期結婚、早期結婚、強制結婚及び女性器切除など、あらゆる有害な慣行を撤廃する—、その他、多くの小目標や指標が掲げられている (外務省, 2022)¹⁵⁾。

ネパールにおいて、バディ族が直面しているジェンダー差別は、固定化されたカースト制度の概念により、MDGsやSDGs施行後も依然として変化していない現実がある。

高橋 (2021)¹⁶⁾は、性別ごとの無意識の偏見 (unconscious bias) は、社会で固定化された役割や慣習によって刷り込まれたものであり、その構造は差別的であり、改善のためには、

偏見に基づいてつくられた構造そのものを問い直すことが必要であると述べている。三輪(2016, p.241)¹⁷⁾は、「あらゆる分野のあらゆる政策と施策において、効果的なジェンダー配慮が実施され、そのことにより女性と男性の両方が開発のあらゆるレベルに平等かつ主体的に参加し、また恩恵を享受する状態」を「ジェンダー主流化」と呼んでいる。ジェンダー主流化の実現に求められる取り組みには、対象となる社会やコミュニティの状況によって異なる処方箋が必要であり、丁寧な分析や調査を行うことによって、ジェンダー主流化を目指した取り組みを、具体的かつ効果的に推進することができると、三輪(2016)¹⁸⁾は説明している。

(3) 岡崎市を拠点とする、特定非営利活動法人ゴスペルエイドのネパールのバディ族への取り組みについて

ゴスペルエイドについて、内閣府(2021)¹⁹⁾は、「この法人は、人身売買・強制売春の被害女性、子どもなど社会的弱者に対して、職業訓練・雇用創出・教育的支援・金銭的支援等の事業を行い、社会的な地位を確立し自立できるように、基本的人権の充実に寄与することを活動の目的とする」と記載している。

ゴスペルエイドの公式ホームページには、「2019年、西ネパールの村で児童労働を強いられていた7歳の女の子をカトマンズに設立した『ゴスペルホーム』に救出し、学校に通う機会を与えることに成功しました」「その後も農村部で夫の不貞により見捨てられた妻と3人の子どもたちを救出しました」「私たちはこれからも教育機会に恵まれない子どもたちに学びを届けるとともに、カースト差別、因習、女性蔑視に苦しむ女性らの生活改善のために活動していきます」「一人でも多くの見捨てられた人、子どもが助け出され、その結果としてSDGsの目標である、識字状況の改善、初等教育就学状況におけるジェンダー格差の改善がなされ、ひいては身分や性別による差別のない社会がネパールにもたらされるよう活動を続けます」と述べられている(Gospel Aid, 2018)²⁰⁾。

具体的な活動として、上述の子どもや女性の救出、救出された人々が集うゴスペルホームの設立、ゴスペルホームの経済支援及び人材育成の支援、村の生活向上のためのヤギプロジェクト⁽¹⁾、村の生活向上のための試験農地⁽²⁾、日本で働きたいというバディの人々のため日本語研修と留学、カトマンズの作業所で作成したアクセサリーや現地スタッフがネパールで買い付けたコーヒー豆の日本への輸入、販売、ホームページ作成、アプリ開発などによるIT技術を用いた職業訓練及び協働する仲間の育成、などを行っている(Gospel Aid, 2018)²¹⁾。

ゴスペルエイドのホームページの「OUR GOAL」には、「かつてネパールでアンタッチャブルと呼ばれた人々が、カースト差別と貧困から立ち上がり、自立し、尊厳ある生き方を得るためにゴスペルエイドは必要な支援をします。ホームで愛情と教育の機会を得て育った子どもたちがやがて自立して、自分たちのコミュニティーを支えることができる日まで！」という目標が掲げられている(Gospel Aid, 2018)²²⁾。

3. 研究の目的

本研究は、岡崎市にあるNPO法人ゴスペルエイドのネパール現地人スタッフの講話を通じた、教職・保育職を目指す学生のSDGsに関する学生の学びと啓発案の提案を行うことを目的としている。

4. 対象と方法

(1) 調査対象について

研究対象は、幼稚園教諭免許状、保育士資格、小学校教諭免許状の取得を目指す子ども教育学部に所属する私立の女子大学3、4年生のうち43名である。

(2) 研究方法について

研究期間は、2022年9月27日(火)の4年生を対象とした、「教職実践演習(小)」の特別授業及び、2022年9月28日(水)の3、4年生を対象とした専門ゼミナールにおける、特別授業であった。

特別授業には、9月に来日した、ネパールのゴスペルエイド現地スタッフである、シータ・バディ氏、及びバディカフェ代表のウィリアムズゆり氏、NPO法人ゴスペルエイド理事の大宮玲子氏が、講話を行った。

(3) 質問項目について

対象者1への事前調査の項目は、(1)現在世界が抱えている様々な問題について、関心に変化はありましたか。(5件法) (2)(1)についての簡単な理由をお書きください。(自由記述) (3)国際社会の現状についての知識に変化はありましたか。(5件法) (4)(3)についての簡単な理由をお書きください。(自由記述) (5)国際的な視野は広がりましたか。(3件法) (6)(5)についての簡単な理由をお書きください。(自由記述) (7)今日までに、NPO法人ゴスペルエイドのことは知っていましたか。(2件法) (8)知っていたと回答した方は、何で知りましたか。(4件法) (9)「その他」と回答した方は、何で知りましたか。(自由記述) (10)SDGsの目標は17個ありますが、今日の講話は、SDGsの目標のどれに関連すると思いますか。(複数回答可) (11)今日の講話から、考えさせられた項目(複数回答可)を選んでください。(12)今日の講話から、今後関心をもっていきたいと考えるもの(複数回答可)を選んでください。(13)今回の講話&交流の中で最も印象に残ったことや話は何でしたか。(自由記述) (14)本日の講話&交流の全体的な感想をお書きください。(自由記述)であった。

5. 結果と考察

(1) 現在世界が抱えている問題への関心の変化について

講義後の、現在世界が抱えている問題への関心の変化について、5件法(変化がある(上がった)、変化がある(少し上がった)、変化がある(少し下がった)、変化がある(下がった)、変化なし)で分析したところ、回答した学生(n=39)の76.9%が「変化がある(上がった)」、23.1%が「変化がある(少し上がった)」と回答した。

上述の選択の理由についての自由記述をテキストマイニング⁽³⁾したところ、名詞では、「世界(12)」「問題(11)」「お話(8)」「ネパール(6)」「差別(6)」「今回(6)」「カースト(5)」「貧困(5)」「様々(5)」「興味(5)」「日本(5)」「関心(4)」「教育(4)」「当たり前(4)」「生活(4)」が上位に挙げられた。動詞としては、「知る(27)」「聞く(16)」「思う(12)」「できる(10)」「感じる(7)」「受ける(4)」「考える(4)」「出来る(4)」が上位に見られた。それぞれの繋がりをみると、「教育」と「受ける」、「具体」と「様子」、「視野」と「広げる」、「私たち」と「当たり前」が強い関係の共起キーワードとしてグループ化されていた。

共起キーワードが使用されている自由記述の例(カッコ内は共起キーワード)を挙げると、「(教育・受ける)同じ世界でも、自分の知らない場所で想像もつかないほどの差別を

受けている人がいること、学校に行けず教育を受けられない子どもが沢山いることを知ったことで関心が高まりました」「(具体・様子)具体的な様子を口で聞けたり写真で見たりしたから」、(視野・広げる)日本は他の国に比べて比較的経済的にも安定しているため、貧困問題などに目を向けることがなかったが、世界には様々な問題を抱えている国がたくさんあるため視野を広げて自分にできることはなにか考える必要があるなど感じた」「(私たち・当たり前)普段不自由なく暮らしているけど、世界には、まだまだ私たちが当たり前とと思っていることが無かったり、十分に教育を受けられていないことが分かったから。」等の記述が見られた。アフターコーディングでは、「実際に現地の方からお話を聞くという体験を通したから」という意見が16と、全体の41.0%を占め、最も多い理由であった。次に多かったのは、「自分の知らなかった世界を知ること、世界観が広がった」という意見が8と全体の20.5%を占めた。その他、「日本の生活を比較して学んだ」ことや「自分にできることについて」考えた意見、「胸や心が痛んだ」という意見が見られた。

よって、シータ・バディ氏に実際の体験談を聞くということが、現在世界が抱えている問題への関心の増加に繋がったと考えられる。

(2) 国際社会の現状についての知識の変化について

講話を聞いたことによる、国際社会の現状についての知識の変化について、(1)と同様に、5件法(変化がある(上がった)、変化がある(少し上がった)、変化がある(少し下がった)、変化がある(下がった)、変化なし)で分析したところ、回答した学生(n=39)の64.1%が「変化がある(増えた)」と回答し、33.3%が「変化がある(少し増えた)」、2.6%が「変化なし」と回答した。

上述の選択の理由についての自由記述をテキストマイニングしたところ、名詞では、「ネパール(8)」「現状(8)」「知識(7)」「問題(5)」「今回(5)」「カースト制度(4)」「国際社会(4)」「差別(4)」「お話(4)」が上位に挙げられた。動詞としては、「知る(20)」「聞く(13)」「できる(11)」「思う(9)」「感じる(4)」「考える(4)」「出来る(4)」「いく(4)」が上位に見られ、自由記述には、「あまり外国について深く考えていなかったけど、ネパールの現状を知って、カースト制度について深く考えられるようになったから」「ネパールについての知識はほとんどなく、テレビで他の地域の貧困の国については見たことがあったけど昔のテレビで今でもこういった状況ということを知ることができました」「世界にはさまざまな問題を抱えて、危険と隣り合わせで暮らしていたり、カースト制度に悩まされて生きている人たちがたくさんいることが分かった」という、ネパールの事情を知ることができたという意見や「今回の講話を聞けなかったらネパールについての現状など知らなかったの、他の国についても学びたいと思うきっかけになった」「今回、シータさんの話を聞いてネパールの事情は知れたので、他の国や地域の国際社会の現状もあるのかなと感じました」といった、他の国の事情についての調べてみたいという意見が見られた。

講話を聞いたことによる、国際社会の現状についての知識に変化について、学生の指す「知識」は、ネパールの現状やカースト制度の現状に偏りはあるものの、日本以外の国に関する知識の増加という点において、強い関心をもちながら増加させることができたと考えられる。

(3) 国際的な視野の変化について

講話を聞いたことによる、国際的な視野の変化について、5件法(変化がある(広がっ

た)、変化がある(少し広がった)、変化がある(少し狭まった)、変化がある(少し広がった)、変化なし)で分析をしたところ、回答した学生(n=39)の66.7%が「変化がある(広がった)」、30.8%が「少し広がった」、2.6%が「変化なし」と回答した。

上述の選択の理由についての自由記述をテキストマイニングしたところ、名詞では、「世界(7)」「現状(7)」「知識(6)」「問題(5)」「今回(4)」「カースト制度(4)」「国際社会(4)」が上位に挙げられた。動詞としては、「知る(25)」「できる(13)」「感じる(11)」「思う(8)」「出来る(4)」が上位に見られた。共起キーワードでそれぞれのワードの繋がりを見ると、特に繋がりが強かったものは、「貧困」と「苦しめる」、「シータ」と「おどろく」と「若い」、「違う」と「暮らす」、「輸入品」と「遠い」、「児童」と「バックグラウンド」、「輸入品」と「遠い」であった。関連する自由記述(カッコ内は共起キーワード)としては、「(貧困・苦しめる) 貧困や差別で苦しめられている人々について知れたから」「(シータ・おどろく・若い) シータさんが女性でまだ若くして日本人と協力して企業し、学びながら自分の価値観を大事にして、子どもたちを助けていることにおどろきました」「(違う・暮らす) 同じ世界で暮らしているのに、生まれた場所、地域が違う中でこんなにも扱いが違う、生き方が違うということを知り、自分が思っている以上に世界は広いということ、また自分の視野は狭いのだということを感じたため」「(輸入品・遠い) 遠く離れた国であっても、コーヒーなどの輸入品を意識して選んだり、カフェを利用したりすることで何かの助けになるのだと感じました」「(児童・バックグラウンド) 外国籍というバックグラウンドだけでなく更に他の背景がある可能性もあると感じて、外国籍の児童の対応も1つでなく個々に合わせる必要があると感じた」という記述が見られた。

国際的な視野の広がりについて、宮腰(2022)²³⁾は、2021年度にゴスペルエイドの佐藤氏に講話を頂きスタンプラリーイベントを行ったところ、学生の国際社会の現状に関する知識についての増加は見られたものの、国際的な視野の広がりを見ることができなかったことから、そのためには、外国へ行く、外国人を招聘するなどの外国人との実際の関わりや行動が必要となってくると述べている。今回の調査は、事後アンケートのみであったことから、昨年度のデータと比較したり、今回の前後比較を行ったりすることはできないが、今回、シータ・バディ氏に実際に来訪頂き、対面による講話を開催したことにより、「国際的な視野が広がった」と97.4%の学生が回答しており、外国人との触れ合いによる効果を確認することができたことが考えられる。

(4) 岡崎市にあるNPO法人ゴスペルエイドの認識について

昨年度、筆者の勤務する大学・短期大学にて、人権問題委員会がNPO法人ゴスペルエイドの活動を学生の人権研修に位置づけ動画を作成し、配信を行うという形での研修を行った。また、筆者の専門ゼミナール生が中心となり、同法人と協働したSDGsスタンプラリーを大学の主催する教育フォーラム内でイベントとして行った。本年度、ネパール人現地スタッフのシータ・バディ氏を招き、特別講義を行ったのは、上述の経緯があることから、今回の学生参加者におけるNPO法人ゴスペルエイドの認知度を調査した。

結果として、79.5%の学生が「知っていた」、20.5%の学生が「知らなかった」と回答しており、8割近い学生が認知をしていた。どこで知ったかということについて、46.2%が「昨年度の教育フォーラム内で行ったSDGsスタンプラリーで知った」と述べており、昨年度のSDGsスタンプラリーの効果を示す結果となった。次いで、15.4%が「昨年度の授業で知った」、12.8%は、「昨年度の人権委員会の配信動画で知った」と回答した。25.6%がそ

の他であった。「その他」と回答した10名のうち、2名は、「ゼミナール内で知った」と回答していたが、他8名の理由は不明であった。

(5) 講話に関連するSDGsの目標について

「SDGsの目標は17ありますが、今日の講話は、SDGsの目標のどれに関連すると思いますか？」という質問に対し、最も多かった順から「SDGs1『貧困をなくそう』(35)」、「SDGs10『人や国の不平等をなくそう(34)』」、「SDGs4『質の高い教育をみんなに』(32)」、「SDGs16『平和と公正をすべての人に』(28)」、「SDGs3『すべての人に健康と福祉を』(25)」、「SDGs6『安全な水とトイレを世界中に』(21)」（6位以下省略）であった。

「今日の講話から、考えさせられた項目（複数回答可）を選んでください」という質問に対し、最も多かった順から「貧困について(36)」、「教育について(33)」、「人や国の不平等について(32)」、「平和と公正について(23)」、「ジェンダー平等について(19)」、「健康と福祉について(18)」（6位以下省略）であった。

「今日の講話から、今後関心をもっていきたいと考えるもの（複数回答可）を選んでください」という質問に対し、最も多かった順から「貧困について(32)」、「教育について(32)」、「人や国の不平等について(26)」、「平和と公正について(19)」、「飢餓について(19)」、「ジェンダー平等について(16)」（6位以下省略）であった。

上述の3つの質問とも上位に挙げられた項目は、「SDGs1『貧困をなくそう』」、「SDGs4『質の高い教育をみんなに』」、「SDGs10『人や国の不平等をなくそう』」、「SDGs16『平和と公正をすべての人に』」であった。また、2つの質問で上位に挙げられた項目は、「SDGs3『すべての人に健康と福祉を』」と「SDGs5『ジェンダー平等を実現しよう』」であった。

筆者の勤務する大学の学生は、女子大学であり、教育、保育に関係のある学生が学んでいる。学生が関心をもったワードには、貧困、教育、不平等、平和と公正、健康と福祉、ジェンダーなど、教育や保育に携わる学生に必要なワードが挙がっており、提供した学びが適切なものであったと考えられる。

(6) 講話と交流の中で最も印象に残ったことについて

今回の講話&交流の中で最も印象に残ったことについて、自由記述をテキストマイニングしたところ、名詞では、「バディ(18)」「族(12)」「シータ(11)」「印象(10)」「名前(8)」「カースト制度(7)」「子どもたち(7)」「カフェ(6)」「教育(5)」「現状(5)」「差別(4)」「行動(4)」が上位に挙げられた。動詞としては、「思う(20)」「残る(11)」「変える(8)」「感じる(8)」「いく(7)」「受ける(6)」「住む(5)」「救う(4)」「続ける(4)」「持つ(4)」「しまう(4)」「できる(4)」、形容詞では、「強い(6)」「カッコいい(3)」「すごい(3)」が上位に見られた。自由記述では、「カーストが最下位で名前でも身分がわかってしまうにも関わらず、バディという名前を使ってカフェをして、尊厳を持って運営したいと思う根性が、同じ年代の女性としてとてもカッコいいと感じました」「シータさんがバディ族を変えようと自ら立ち上がって教育を受け、生かしているところ」「現在でもカースト制度が残り、教育や養育が不平等であるというお話が衝撃でした。同時に支援してくれる環境が備わっていることは、当たり前ではないのだと学びました。どんな状況であっても子どもたちが学べる場を提供することが大切だと感じました」「カーストが名前になっていると、隠したくなることもあると思うけれど、『バディカフェ』という名前でもカフェの経営を考えているということが印象に残った。名前のもつイメージを変えるのは難しいことだと思うけれど、自分

のカーストのイメージを変えるという信念を持って行動されているのがとても強くてかっこいいと感じた」等が見られ、カースト制度の下、差別を受け続けてきたシータ氏が逆境に立ち向かい、現地の子どもを救いながら、現地において「カースト制度」のイメージそのものを変えようとしていることについての記述が散見された。

(7) 講話を通した、自身の「変化」について

講話を通し、学生自身の中に生まれた「変化」について、自由記述の回答をアフターコーディングしたところ、「これからもっと積極的に世界に目を向けていきたい、もっと世界の情報を知りたい」という意見が 12 と最も多く、次いで「何か自分にできることがあれば行きたい」が 5、「日本の生活は恵まれていることに気づいた、日本で今の生活ができていることに感謝」が 5、「自分の努力次第で何でもできることを学んだ」という意見が 4、「実際に海外へ行って自分の目で現状を見てみたい、実際にボランティアを行いたい」という意見が 2、「今回学んだことを子供達に伝えていきたい」という意見が 2、その他が 9 であった。

海外の現状や支援をテーマとしたワークショップでは、参加者は、遠くで起こっている悲惨な現実に対して可哀そうとか、助けてあげなければ等の発想をもつこところに着地するだけで、その事実に対して、自分達は現在どのように関わっており、どう打開していいのかを考えることが必要であると、近藤(2016)²⁵⁾は、指摘している。よって、事実を捉えた上で、今後どのように学生自身が関わっていくかを考察し、行動するところまで到達するには、授業やゼミナールで継続的に行うなど、教員の支援が必要となると考える。

6. まとめと今後の課題

本研究は、岡崎市にある NPO 法人ゴスペルエイドのネパール現地スタッフとの交流を通じた、教職・保育職を目指す学生の SDGs に関する学生の学びと啓発案の提案を行うことを目的としていた。

学生の「現在世界が抱えている問題への関心の変化」について、回答した学生の全員が「変化がある(上がった)・(少し上がった)」と回答し、シータ・バディ氏に実際の体験談を聞いたこと自体が、現在世界が抱えている問題への関心の増加に繋がっていた。

「国際社会の現状についての知識に変化」について、回答した学生の 97.4%が「変化がある(増えた)」または「変化がある(少し増えた)」と回答し、学生の指す「知識」はネパールの現状やカースト制度と偏りはあるものの、日本以外の国に関する知識の増加という点において、強い関心と知識を増加させることができていた。

「国際的な視野の変化」について、回答した学生の 97.6%が「変化がある(広がった)」または「少し広がった」と回答した。シータ・バディ氏に実際に来てもらい、対面でのお話を頂いたことにより、学生の意識として、国際的な視野が広がったと 97.4%の学生が回答したことから、外国人による講話の効果を確認することができた。

「NPO 法人ゴスペルエイドの認知度」を調査したところ、79.5%の学生が「知っていた」と回答し、そのうちの 46.2%が「昨年度の教育フォーラム内で行った SDGs スタンプラリーで知った」と述べていたことから、2021 年度に行った SDGs スタンプラリーは意味のあるものであったことを示すこととなった。

今回の講話と SDGs の目標との関連、考えさせられた項目、今後関心をもっていきたいと考えるもの(複数回答可)について、学生の回答で 3 つの質問とも上位に挙げられた項目

は、「SDGs1『貧困をなくそう』」、「SDGs4『質の高い教育をみんなに』」、「SDGs10『人や国の不平等をなくそう』」、「SDGs16『平和と公正をすべての人に』」であった。2つの質問で上位に挙げた項目は、「SDGs3『すべての人に健康と福祉を』」と「SDGs5『ジェンダー平等を実現しよう』」であった。筆者の勤務する大学は女子大学で教育、保育に関係のある学生が学んでいる。貧困、教育、不平等、平和と公正、健康と福祉、ジェンダーなど、教育や保育に携わる学生に必要なキーワードが並んでおり、学びが適切なものであったと考える。

講話の中で最も印象に残ったことについて、カースト制の下、差別を受け続けてきたシータ氏が逆境に立ち向かい、現地の子どもを救いながら、現地において「カースト制」のイメージそのものを変えようとしていることについての記述が散見された。

講話を通して学生自身の中に生まれた「変化」について、「これからもっと積極的に世界に目を向けていきたい、もっと世界の情報を知りたい」という意見が最も多く、次いで「何か自分にできることがあれば行きたい」、「日本の生活は恵まれていることに気づいた、日本で今の生活ができていることに感謝」が見られた。世界の現状を捉えた上で、今後どのように学生自身が関わっていくかを考察し、行動するところまで到達するには、授業やゼミナールで継続的に行うなど、教員の支援が必要となると考える。

最後に、今回、バディカフェ代表のウィリアムズゆり氏、NPO 法人ゴスペルエイド理事の大宮玲子氏、シータ・バディ氏より、ゴスペルエイドの活動についての課題を伺ったところ、シータ氏より、現地における課題について、現地の女性たちの自立支援のため、技術を与えるべく、センターを建設中であるが、資金不足のためなかなか進まないことを特に挙げられていた。また、日本における課題として、現地支援のための資金不足および資金調達への足掛かりを作ることの困難さを大宮氏が挙げていた。よって、この団体に最も重要であるのが、資金調達であり、そのための日本における人々への広い周知が当面の課題となる。ゴスペルエイドの活動と学生の学びがwin winになるためには、ゴスペルエイドが、岡崎市内にある大学において、より多くの学生に、活動の周知を行い、学生はそこから様々学びを得ていくという形が考えられる。また、ネパールにおけるバディ族がカーストの壁を超えることに繋がるよう、2023年度以降、大学、研究者、学生の立場からできるゴスペルエイドへの働きかけを更に模索、実行していくことを今後の課題としたい。

附記

本研究は、令和4年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査No. 22018の承認を受けて実施している。

注釈

- (1) 「西ネパールのバディ族の村では日雇いや採砂の仕事ぐらいしかなく、常に貧しい暮らしを強いられています。もし、現金収入があれば子どもを売らずにすむ。そんな緊急性のもと現金収入や食料となるヤギ飼育のプロジェクトが始まりました。西ネパールの村につがいのヤギをおくり繁殖を図っています。」(Gospel Aid, 2018)
- (2) ローカルリーダー主導で西ネパール・スルケット州に試験農地(借地)を得ました。現在、自然農法による作付けを試みています。(Gospel Aid, 2018)¹⁾
- (3) ユーザーローカル テキストマイニングツール <https://textmining.userlocal>

1. jp/ による分析。

引用文献

- 1) 宮腰宏美「保育士資格、幼稚園教諭免許を目指す学生に対し、SDGs に関する啓発活動を行った際の意識調査およびSDGs 普及活動プログラムに関する一考察 ―岡崎市を拠点とする国際NPO 法人と協働して―」『岡崎市大学懇話会 地域活性化研究』2022年、30-44 頁
- 2) 宮崎智絵「ネパールにおける異文化結婚と教育」『二松學舎大學論集(65)』、2022 年、49-71 頁
- 3) 前掲 2)
- 4) ヨヤーナ・ポッカレル「ネパールのダリット女性たち」『公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム』、2017 年、http://www.kfaw.or.jp/correspondents/docs/27-3_Nepal_J.pdf (2022 年 9 月 15 日最終閲覧)
- 5) 前掲 4)
- 6) Bishwakarma, P. L. “*The situation analysis for dalit women of Nepal*” Paper presented at National Seminar on ‘Raising Dalit Participation in governance’, organized by Centre for Economic and Technical Studies in co-operation with Friedrich-Ebert-Stiftung, Lalitpur, Nepal, 3-4 May 2004.
- 7) 青木千賀子「持続可能な社会開発とエンパワーメントをめざして―ネパールのダリット女性グループの活動事例から―」『公益財団法人東海ジェンダー研究所 ニュースレターLIBRA(75)』、2022 年、2 頁
- 8) 藤倉康子「ネパールのダリット女性と暴力」『国際人権 NGO 反差別国際運動』、https://imadr.net/books/192_2/ (2022 年 9 月 15 日最終閲覧)
- 9) 前掲 8)
- 10) Gautam, P., Soomro, M. H., Sapkota, S., Gautam, K. R., & Kasaju, A. “*Barriers to utilization of sexual health services among young people in district dang nepal: A qualitative study*” . Journal of Medicine(19-2), 2018, pp.79-83.
- 11) 前掲 8)
- 12) 前掲 7)
- 13) 浅井幸子「第 9 章 ジェンダー 1. SDGs とジェンダー」北村友人・佐藤真久・佐藤学『SDGs 時代の教育 すべての人に質の高い学びの機会を』、学文社、2019 年、150-161 頁
- 14) 外務省「JAPAN SDGs Action Platform」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/-sdgs/statistics/goal5.html> (2022 年 9 月 15 日最終閲覧)
- 15) 前掲 14)
- 16) 高橋真樹『日本の SDGs それってほんとにサステナブル?』、2021 年、大月書店
- 17) 三輪敦子「第 13 章 ジェンダー 4. 女性の貢献を「可視化」し、関心とニーズを「主流化」する」田中治彦・三宅隆史・湯本浩之『SDGs と開発教育』、学文社、2016 年、235-254 頁
- 18) 前掲 17)
- 19) 内閣府「NPO 法人ポータルサイトゴスペルエイド」2021 年、<https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/023002251> (最終閲覧日：2022 年 11 月 3 日)

- 20) Gospel Aid「私たちの働き」2018年、<https://gospel-aid.org/work/>（最終閲覧日：2022年11月3日）
- 21) Gospel Aid「ビジョン」2018年、<https://gospel-aid.org/vision/>（最終閲覧日：2022年11月3日）
- 22) 前掲 21)
- 23) 前掲 1)

謝辞

本研究に御協力頂きました、ゴスペルエイド及びバディカフェの皆様、研究に関わって下さいました全ての方々に心より感謝を申し上げます。